



蒼鷹

オオタカ ●タカ目タカ科
カラスほどの大きさのタカ。青灰色の羽色から古くは「アオタカ」とも呼ばれた。主にカモ類などを食べる。環境省準絶滅危惧種。
photo by harum.koh ©BY-SA



青葉木菟

アオバズク ●フクロウ目フクロウ科
黄色い大きな目のフクロウ。青葉が茂る夏に渡来するが名前の由来。夜行性で、セミなどを食べる。京都府準絶滅危惧種。



鴞ノスリ

●タカ目タカ科
野を撮るように低空で飛行するのが名前の由来とされ、冬になると人里近くによく現れる。木や電柱のついでで待ち伏せしてネズミなどを狩る。京都府準絶滅危惧種。photo by harum.koh ©BY-SA

深山頼白



●スズメ目ホオジロ科
頭の黄色と冠羽が目立つ、冬に渡来する鳥。オス(写真右)よりもメス(写真左)の方が黄色が濃い。雑木林の地上で、種子などを採っていることが多い。

差羽

ザンバ ●タカ目タカ科

夏に渡来する、里山を代表するタカ。野田川中流域で見られる。「ビッキーン」と鳴き、トカゲやカエル、ヘビなどを食べる。環境省絶滅危惧II類。
photo by Hiroshi Ohtsuki



鵜

●タカ目タカ科

野田川の河口にいる、魚が大好きなタカ。ヘリコプターのようにホバリングしながら獲物を探し、急降下する。英名・オスプレー。環境省準絶滅危惧種。
photo by Reiko Kadawaki



百舌

モズ ●スズメ目モズ科

いろいろな鳥の鳴きまねをするのが名前の由来。取った虫などをとがった枝などに串刺しにする「はやにえ」の習性がある。photo by mabobo ©BY



長元坊

チョウゲンボウ ●ハヤブサ目ハヤブサ科

小型のハヤブサ。風が強い午後や夕方に、写真のようにホバリングしてネズミ、モグラなどを狩る。京都府準絶滅危惧種。
photo by Ferran Postana ©BY-SA



柄長

エナガ ●スズメ目エナガ科

尾羽が長く、ぬいぐるみのようにふわふわ。繁殖期には巣で卵を抱いているために、尾羽にねぐせのような曲がついていることがある。



野鶉

ノビダキ ●スズメ目ヒタキ科

春と秋の渡りの時期に飛来する。主に昆虫を食べる。物のついでにとまる傾向があるので、看板の上を探すと見つけやすい。



瑠璃鶉

ルリビタキ ●スズメ目ヒタキ科

鮮やかな青い羽が目立ち、冬に渡来する鳥。低木にとまり、地上の昆虫や植物の実を素早く食べ、また樹上に戻るといった行動を繰り返す。photo by jiroh ©BY



常鶉

ジョウビタキ ●スズメ目ヒタキ科

橙色が美しい、冬に渡来する小鳥。「ヒッヒッカカカ」と鳴きながら、尾羽をふるわせ、頭をさげる動きが特徴的。photo by skamatama ©BY-SA



三光鳥

サンコウチョウ ●スズメ目ヒタキ科

オスの長い尾羽と太い水色のアイリングが特徴的、夏に渡来する鳥。「ツキヒホシ(月日星)ホイホイ」と鳴くのが名前の由来。photo by jiroh ©BY



大瑠璃

オオルリ ●スズメ目ヒタキ科

鮮やかな青い羽と「ヒーリーリー」という美しい声を持つ。ウグイス、コマドリと並ぶ日本三鳴鳥の一つ。夏に飛来し、渓流沿いの岩のくぼみなどに、コケを使って巣を作る。



黄毛鶯

アマサギ ●ペリカン目サギ科

夏に渡来するシラサギ。夏羽の亜麻色(写真下)が名前の由来と言われる。冬羽になると全身が白になる(写真上)。photo by Reiko Kadawaki



緋鳥鴨

ヒドリガモ ●カモ目カモ科

冬鳥として渡来し、水場に生息するカモ。レンガ色の頭にクリーム色の額がオス(写真左)で、全体が褐色なのがメス(写真右)。オスとメスが頭を下げ並んで泳ぐ求愛行動が可愛い。
photo by Alpudake ©BY-SA



雉

キジ ●キジ目キジ科

桃太郎にも登場する日本の国鳥。農耕地や草地に生息する。オスは顔が赤く(写真右)体長80cmを超えるものもいて「ケン、ケン」と鳴く。メス(写真左)は一回り小さく、黒い斑点がある。photo by Alpudake ©BY-SA



鶴

コウノトリ ●コウノトリ目コウノトリ科

野生では一度絶滅したが、豊岡市で放鳥されたものが、与謝野町を頻りに訪れている。体長1mを超える大型で、ツルと混同されやすい。環境省絶滅危惧IA類。特別天然記念物。



花鶉

アトリ ●スズメ目アトリ科

冬に渡来する、黒と橙のはっきりした模様美しい鳥。年によっては数万羽単位の大群を見ることが出来る。
photo by skamatama ©BY-SA



鶯

ウソ ●スズメ目アトリ科

まるまるした体形の冬に渡来する鳥。口笛のような声で鳴くことから、口笛を意味する古語「うそ」が名前の由来。
photo by jiroh ©BY



黄連雀

キレンジャク ●スズメ目レンジャク科

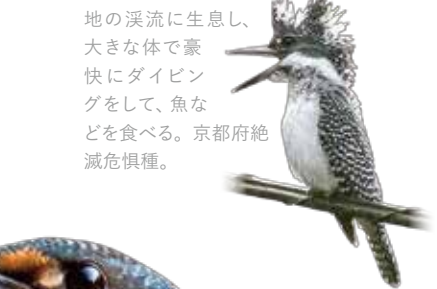
尾羽の先端が黄色いレンジャク。冬に渡来し、ヤドリギ・ナナカマドなどの実を食べるため、この木を探しておくといくつか見つけやすい。
photo by Vukilov ©BY-SA



山翡翠

ヤマセミ ●ブッポウソウ目カワセミ科

日本最大のカワセミ類で、全長は40cm近くになる。主に山地の渓流に生息し、大きな体で豪快にダイビングをして、魚などを食べる。京都府準絶滅危惧種。
photo by coniferconifer ©BY



緋連雀

ヒレンジャク ●スズメ目レンジャク科

冬に渡来する、尾羽の先端が赤いレンジャク。キレンジャクと同じく、長い冠羽が特徴的。
photo by coniferconifer ©BY



赤翡翠

アカショウビン ●ブッポウソウ目カワセミ科

赤いくちばしがトレードマークのカワセミ。夏鳥として渡来し、ブナ林などの山深い森に生息する。京都府準絶滅危惧種。photo by Jaan Thompson ©BY



翡翠

カワセミ ●ブッポウソウ目カワセミ科

宝石の翡翠(ひすい)と同じ漢字の名前を持つ、青く輝く羽を持つ鳥。水辺でホバリングし、一気にダイビングして小魚などを食べる。野田川の水面近くを飛び交うのがよく見られる。



vol.04

与謝野の野鳥図鑑

元日の昼下がり。
溝口ふう香さん(10)が、石川小で
お父さんとたこ揚げをしていた時だった。
空をでっかい鳥が横切った。
「コウノトリだ」
大きな翼を広げて飛んでいく姿を、
ふう香さんは見えなくなるまで追いかけた。

「飛ぶパンダ」 コウノトリが移住?

3学期が始まってクラスで自慢したら、寺内りこさん(11)は「私も買い物に行く時に見たよ」と話した。成毛裕飛さん(10)も「登校する時に家の近くの田んぼによくいるよ」と言う。あれ? すごい動物に出会ったと思ったのに、みんな見たことあるの? 溝口さんが23人の4年生全員に聞いてみると、コウノトリを見かけた友達は15人もいた。「だって、ふつうに電柱にとまってるでしょ」と言う大泉真帆さん(10)は昨秋、集合住宅の4階の階段で絵を描いていると、コウノトリが飛んできたという。「背中がバサッと羽の音がした。くちばしでカムシをつまんでいたよ。特別天然記念物「コウノトリ」は、いつの間にか身近な存在になっていった。

世界にたった2000羽

コウノトリは与謝野に何をしに来るの? 疑問を抱いた4年生は兵庫県豊岡市の県立コウノトリの郷公園に出かけた。コウノトリは1971年に野生個体が絶滅したが、公園では1965年から保護活動を始め、人工飼育で100羽まで増やして2005年に野生復帰を実現させた。現在は全国へ巣立った子たちを追跡調査している。4年生は自然解説員に驚きの事実を聞いた。みんながよく会うコウノトリは世界に2000羽あまりしかおらず、この数は中国のジャイアントパンダと変わらないという。大泉さんは「まるで飛ぶパンダ。コウノトリは珍しい鳥だったんだ」と目を丸くした。そう錯覚するのも無理はない。コウノトリの郷公園には近年、与謝野町内から120枚もの目撃写真が寄せられていて、その大半は石川小の周りだ。豊岡を流れる円山川流域では100羽近くが巣立ったが、コウノトリは食いしん坊。豊岡だけでは餌が足りず、多くは餌場を求めて全国を旅している。そんなコウノトリにとって、豊岡から30kmも離れたくない与謝野は庭のような場所なのだ。

町内で繁殖「夢じゃない」

記者は5月18日、野田川わくばる前の田んぼにいた3羽のコウノトリを撮影した。公園に写真を送ると、黒青緑青の足輪をつけた3歳の雄(J0098)と黒青黒青の足輪の4歳の雌(J0078)=表紙写真=は、数年前から与謝野に

通っていると分かった。大迫義人研究員は「与謝野を気に入っている若鳥がいるのは確か。観察を積み重ねれば彼らがどこにすみたいのか見えてくる。そうすれば与謝野で繁殖することも夢ではない」と話す。

豊岡の取り組みを知った石川小の4年生は「与謝野にもコウノトリが増えたらいいな」と思った。そこで、学んだことを模造紙にまとめて農家の会議で発表し、「コウノトリを増やすために、水辺の生き物が増える農業をしてください」と呼びかけた。会議に参加していたのは、おからと魚のあらでつくる有機質肥料「京の豆っこ」を使う生産者。後野区の小谷安博さん(60)は「昔はもっと魚がいた。自然に優しい肥料を使って土を元気にして、生き物と共生できる環境を取り戻したい」と語った。

まずは知ることから

小学生の願いは与謝野町の職員にも響いた。加悦谷平野は丹後米の大産地。全国トップクラスの評価を得ているが、産地間競争が激化する中で、作れば売れるという時代ではなくなっている。野菜も状況は同じ。町は与謝野らしい農業のあり方を模索している最中だ。小学生の発表を聞いた農林課の荒木拓哉さん(27)は「米や野

菜という『物』の売り方を考えるだけでなく、魚や虫や動物がいっぱいて、コウノトリまで飛んでくる豊かなふるさとをつくるのが『与謝野ブランド』の進む道では」と気がついた。生き物であふれる田畑が増えればコウノトリも気に入ってくれるはず。そして、そんな田畑をつくる生産者に共感する消費者が増えて、元気な田畑が広がるという。まずは先進地の取り組みを知ろうと、与謝野町はコウノトリの郷公園に依頼して、水辺の生き物が増える農業やコウノトリの生態を学ぶ勉強会を企画した(右欄参照)。8月には、豊岡で「コウノトリを育む農法」を実践する農家や技術者の話を聞く会も予定している。与謝野町農林課(0772-43-9023 / FAX: 43-2194)は、彼らの写真や目撃情報も募っている。コウノトリの郷公園と共有し、移住を応援するのにも役立てると言う。

あなたの絶景



神楽になりました @ illysjinさん

加悦谷祭の写真の中にあつた可愛い一枚。獅子に食べられそうなお男の子も、よく見れば獅子ルック! こんな帽子があるんですね。皆さんの日常の絶景を楽しみにしています。(編集部)



野田川わくばるの近くの田んぼを、エサを探しながら悠然と歩くコウノトリ。珍しい光景ではなく、特別天然記念物が日常の景色の一部になりつつある。

登校中に空を見上げると、4~5桁先の電柱にコウノトリがとまっていた。「近づくたびにげやうかなあ〜」と思ったけど、全くにげなくてびっくりしました。友だちの村田亜美さんは、家の近くの田んぼでエサを食べている所を目撃したそうです。私たちはコウノトリのさと公園に行きました。自然かい説員の三木さんは「コウノトリの目撃件数は年々ふえ、多すぎて数えるのをやめた」と話していました。これからも来てもらえるように、コウノトリがすごしやすいかんきょうづくりを心がけたいです。
石川小学校 下川実莉

究極の贅沢 さえずりシャワー

大江山連峰の豊かな森に囲まれ、野田川が海と山をつなぐ与謝野町では実に120種類もの鳥が確認されているのをご存じだろうか? 表面の野鳥図鑑で紹介したのはほんの一部だけ。クマタカやハヤブサ、フクロウなど希少な猛禽類をはじめ、野田川上流にはオオルリやヒレンジャク、アカシヨウビンなどの美しい渡り鳥も訪れる。下流や阿蘇海の周りでは、図鑑に載っている日本のガンやカモのほとんどを見ることができ、魚のハンターとして有名なミサゴが毎日のように飛び回り、ボラやクロダイをめぐってダイビングを繰り返している。加悦鉄道跡の自転車道をよく散歩するという中江弘之さん(65)=宮津市宮村=は「川沿いに住宅が少ないから鳥も安心なのでしょ

う。営巣できる森も近いし、与謝野は鳥の楽園ですよ」と話す。

今年3日、野鳥観察歴50年という小西忠昭さん(74)=京都市伏見区=ら京都野鳥の会の人たちは、野田川上流域の森を歩いた。国道から少し山に入ると、「ココココ……」と木をつつく音がした。アオゲラだ。森の名歌手と呼ばれるオオルリの美声も聞こえる。よく響く声で「ツキヒホシ(月日星)ホイホイ」と鳴くのは尾羽が長いサンコウチョウ(三光鳥)。東南アジアから繁殖のために渡ってきた鳥たちだ。森にはさえずりがいくつも重なる。「キビタキにクロツグミ、イカルにカケス……」。手のひらに載せたメモに書き込みながら、小西さんは言った。「地元の人には知らないかもしれ

与謝野は鳥の楽園 Wild Bird Paradise



石川小の子どもたち。コウノトリのことを学んでかへ新聞にまとも、生き物いっぱいの子にしようと呼びかけた。

親子で知ろう! 「飛ぶパンダ」 コウノトリの郷公園 出前講座

日時 2017年7月7日(金) 午後7時~ 参加費無料
会場 与謝野町商工会(与謝野町四辻)
問い合わせ 与謝野町農林課(0772-43-9023)



野鳥観察歴50年の小西忠昭さんは「これだけたくさんの鳥がいるのは全国的にも貴重」と話す

れないけど、これだけたくさんの鳥がいる場所は全国的にも貴重ですよ」
同町与謝にある喫茶「もっく」の西原信明さん(65)には、早朝の楽しみがある。午前5時に近くの森へ。携帯コンロで湯を沸かし、コーヒーをいれる。鳥のさえずりに耳を澄ませて、彼らの姿を思い浮かべるのだ。見つけるのが難しくても、スマホに名前をつぶやくと写真や鳴き声が出てくる便利な時代。野鳥観察も手軽になった。西原さんは「鳥たちが目覚める時間が、最もにぎやか。夏の朝に浴びるさえずりのシャワーは気持ちいいですよ」と話す。問い合わせはもっく(0772-43-1334)。

